

6. 諸磯 a 式土器の竹管文について

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡で出土した縄文土器は、表土、グリッドおよび古墳時代以降の遺構埋没土中から得られた資料が大半を占める。そのため、時期的にまとまったものとはならず、各期の断片的な土器型式が確認され、その概要は第4章～第6章に報告したとおりである。ここでは、出土土器のうち点数の多い諸磯 a 式土器について文様を中心に観察し、特徴をみることにしたい。

諸磯 a 式土器は、今回の報告資料のなかでは点数が多いが小破片が主であり、器形が復元できる例や文様構成が把握できる個体資料はない。そのため、断片的な観察になるが、同期の文様や施文法および施文具についての特徴は提示できるものと思う。

以下、2区出土土器を中心に観察していこう。

(1) 肋骨文を施す土器

第272図 53、55、57、58は接合関係はないが、文様や器厚、胎土について類似することから同一個体であると観察される。この資料を中心に文様や施文法について記載し、他の土器についても触れながら特徴をみていきたい。

53、55、57、58 は櫛歯状工具による肋骨文が施されるものであるが、文様等について施文順序にそって1から6の段階に沿って観察していこう。

1. 縄文が器面全面に施される。RL横位であるが、節の形状を観察すると0段多条であろう。文様と重複し、観察部分が限定されるが、おそらく0段3条とみられる。原体は幅2mm程度である。53は1条ごと深い条が現れ、一見すると附加条のようにみえるが、同片および他破片を観察すると、やはり正撚2段のRL(0段3条)であることがわかる。附加条にもみえる不安定な条走行は、2段時の撚りが不均一のため一方の条にのみ撚りがかかり、もう一方の条に巻きつくようになった部分で施文されたためである。他片のように条が整然とする部分もあることから、同一の原体に撚りが均等の部分と、不均等の部

分かあったのだろう。用いる繊維がやや硬質のため、捻転性が不良で末端部で撚りが不十分であったように観察される。条に対する節の傾斜が強いことも同様の理由によるものだろう。

2. 次に単一沈線による垂線を施す。57では垂線間が3.2cmから4cm程度であることから、四単位の波状口縁とすれば、波頂部および波底部からそれぞれ垂下するものといえる。施文は半裁竹管の片側のみを使用することでも施文は可能だが、平行線となる部分は認められないことから、先端の細い棒状工具によるものとみられる。別個体であるが、73では、垂線を平行線文とし、半裁竹管文を使用する例も存在する。

3. 肋骨文は、垂線間を下弦の弧状文により繋げることで構成する。この弧状文は3条が同時に引かれることから、先端部が3本の櫛歯状工具が使用される。さらにこの櫛歯文は3条の上位の弧状線のみが深めとなる。この深浅の差はわずかなものだが、肉眼でも区別できるもので、各弧状文とも同様に上位の弧状線が深めである。工具や施文法に起因するものだが、規則的な文様となっていることから、文様形成におけるアクセントとみることができ、効果を意図した施文手法と考えられる。3本のうち1本が長めとなる櫛歯状工具を用意し、使用したのだろう。施文方位は、観察できる部分では、左側が起点で、右方向へと弧状文が施されている。

4. 垂線と弧状文の交点に円形文が施される。この円形文は、形状がやや不規則なものがみられる点や全周しない部分がある点、底面の深さが不均一である点、また円形文内側にの字状の粘土の軌跡が残る例等から、半裁竹管の回転により施文されるものである。円形文をもつ例は51、54、72、73があるが、72は残存状態が不良のため確定できないが、他例は刺突手法ではなく、やはり半裁竹管の回転により表出される文様である。

円形竹管文は縄文時代各時期に認められ、その中には半裁竹管の回転押捺により施される例も報告されている。しかし、多くの例は円形竹管の刺突によ

6. 諸磯 a 式土器の竹管文について

り表出されるものとされている。現状でいえば、円形竹管文には、円形竹管の刺突によるものと、半裁竹管の回転手法による2種類の施文法があり、回転手法は少例という理解が一般的のように思われる。しかし、注意して円形竹管文が施される資料の報告例をみると、回転手法によるものと観察される例が決して少なくないことに気がつくのである。単純な文様であり、文様構成の主要な位置を占めないことから、あまり注意されてこなかったのだろうか。特に、前期の例ではその傾向が強いように思われる。今回の遺跡例では少例であり、全体的な傾向について言及することはできないが、問題意識の一つとして周辺地域の出土資料について注意していく必要がある。

課題としては、時間差や地域差による文様技法の相違なのか、表出技法に複数存在するのではなく、同一技法となるのか、という点について観察する必要がある。

当面は、半裁竹管の回転によることが明らかなものを円形文として、いわゆる「円形竹管文」とは分けて呼称しておきたい。

5. 頸部に横走条線文が施される。櫛歯状工具が用いられるため、一見すると肋骨文施文と同様の櫛歯状工具のようにみられるが、条線間隔に相違が認められることから、異なる工具が使用されていると考

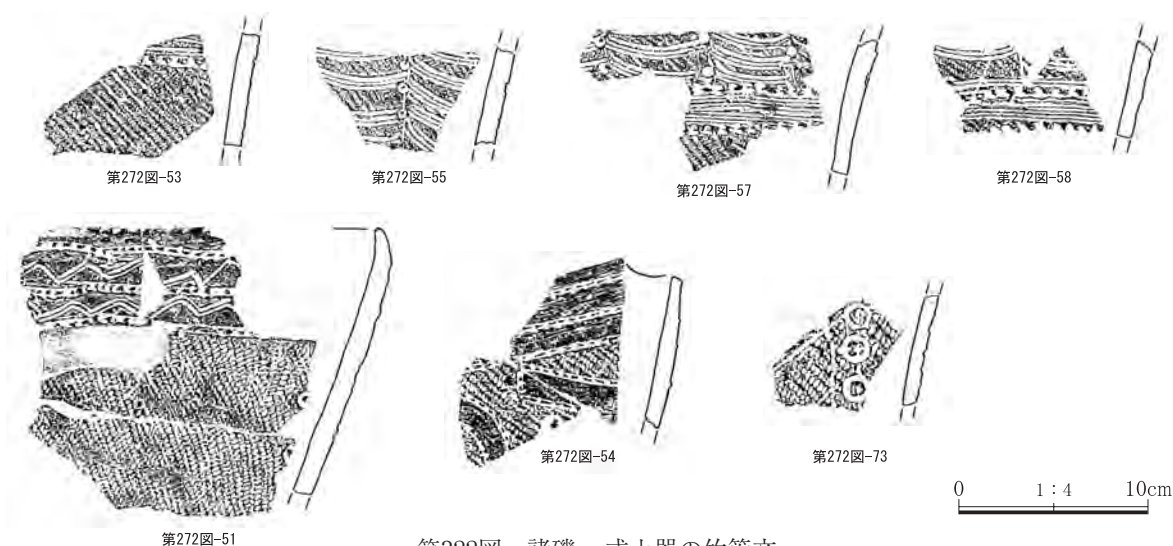
えられる。両端部に半裁竹管による刺突文列が巡るため、単位が観察しにくい、4条単位の櫛歯状工具が使用されるとみられる。

6. 頸部の横走条線文帯の上下端に沿って、刺突文列を加える。半裁竹管を工具とし、器面に対し30°前後の角度で左から右方向へ連続施文される。施文間隔は5mm前後である。この刺突文は、器面に施文具端部を押し付けるように施すことで、逆コの字形の軌跡となる。工具である半裁竹管の幅が4mm弱であり、円形文の施文工具とほぼ一致するところから、同一の工具により文様表出された可能性が高い。

以上のように、肋骨文を主文様とする土器の文様と工具についてみていくと、棒状工具(垂線)、3本櫛歯(肋骨文)、4本櫛歯(横走条線文)、半裁竹管(円形文・刺突文)および縄文(0段3条RL)という複数の工具が使用されていることがわかる。文様表出には、それぞれ施文するための工具が用意され、使用されたのであろう。

(2) 垂線と円形文を施す土器

円形文をもつ73をみてみよう。半裁竹管による垂線を施し、その上に半裁竹管の回転施文である円形文が加えられる。この列でも、半裁竹管という工具は同様であるものの、垂線と円形文では異なる半裁竹管が用いられている。垂線を施すための幅5mm



第322図 諸磯 a 式土器の竹管文

程度の半裁竹管、円形文を施すための幅9mm程度の半裁竹管がそれぞれ使用されている。これも、先の例と同様なものといえるだろう。

(3) 連続爪形文と山形文を施す土器

次に51についてみてみよう。この資料は、連続爪形文間に山形文を施し、胴部に円形文を加える単純な文様構成である。口縁部文様について、施文順序に沿って文様を観察していこう。

1. 縄文が施される。RL横位であるが、条走行はやや不規則であり斜位に近い施文部もみられる。施文状態があまり良好ではないが、2条ごとにやや細い条が1条規則的に観察される。1段3条RLとなるが、種別について、正撚もしくは附加条第1種か判断できない。

2. 平行線文が施される。幅3mm程度であるが、平行線を見ると断面がかまぼこ状を呈する。線刻は浅めであることから、半裁ではなく四分割程度の竹管が使用されたものとみられる。平行線は1, 5cm前後の間隔で3条巡り、2帯の区画が形成される。口縁部に沿って平行に巡るが、つなぎ目部などでやや歪みが生じる場所もみられる。

なお、下位の平行線文は輪積み部に沿って加えられている。

3. 平行線文上に連続爪形文を施す。幅3mm程度で、平行線と同様の四分割竹管が用いられるものと観察される。器面に対して30°程の角度で加えられ、印刻は深めである。

4. 平行線文と連続爪形文により区画された部分に山形文が施される。幅3mm程度であり、平行線文や連続爪形文と同様の工具であろうとみられる。かまぼこ状断面を呈し、平行線間の器面上には擦痕が残ることから、やはり4分割程度の竹管を工具としたものと観察される。山形文の施文方位は左側から右方向へ展開している。

なお、口唇上端部の刻目は、文様施文の工具背部の押圧により表出することが可能だろう。

5. 胴部に円形文が縦位に施される。1／2が欠損す

るため施文法は確定できない。しかし、回転手法によるものとすれば、口縁部文様と同様の工具(4分割程度の竹管)で施文は可能であると考えられる。

以上のように、本資料は、施文工程の2から4は同一工具により文様が施文され、5についてもこれに含まれる可能性が高い。この資料は、4分割程度の竹管という同一工具により施される例といえる。

(4) 竹管文観察の新視点

詳細な竹管文の観察をとおして、諸磯a式の土器のなかにも、①それぞれ異なる工具を用い個々の文様を表出して肋骨文を施す例(53、55、57、58)や垂線と円形文を組み合わせる例(73)と、②同一工具を用いて爪形文や山形文を組み合わせる例(51)があることが判明した。

このような文様施文時の工具のあり方の相違は何に起因するものなのであろうか。文様の種別に関連するものか、地域的もしくは時間的な要因を反映しているものか、今回の資料からはその意味は特定できないが、何らかの有意性をもつものと考えられる。

今回の出土土器は破片資料が主であることから、文様の特徴に関しては部分的観察にとどまっている。しかし、竹管文による文様の観察には、施文法および工具の関係について注意する必要がある、という点を再認識できたことは今回の成果のひとつと考えている。

その中で、「円形竹管文」が円形竹管の刺突によるものか、「円形文」とした半裁竹管の回転手法によるものか、は特に注意をする必要があることが理解できた。単純な文様であるとみられがちだが、竹管文が多用される諸磯a式土器の文様を観察する際にはポイントとなる文様といえるかもしれない。

さらに、「円形竹管文」は前期に限らず縄文時代各期に認められることから、他時期におけるあり方にも注意をする必要があるといえる。施文法についての系統的な観察が必要であると考えている。この点も含め今後の課題として、調査のまとめとしたい。

(原 雅信)